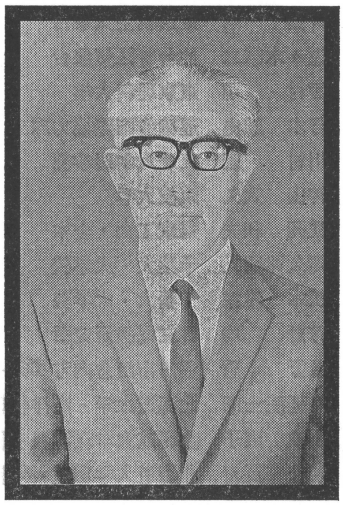
堀内剛二氏の御逝去を悼む



本学会員堀内剛二氏は，年号が改まって間もない平成元年1月9日永眠された．享年75才であった．

堀内氏は昭和13年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業の後，沼津中学校，開成中学校の教壇に立ち，昭和18年春神戸海洋気象台に就職されてから同48年までの30年間，気象庁職員として，気象大学校教授，気象研究所高層物理研究部長，本庁図書課長，長崎海洋気象台長などの要職を歴任された．

気象学会にあっては，第10期から12期までの6年間(1958—64) にわたって理事をつとめられた．

1960年代前半までの気象庁や気象学会の雰囲気は，良くも悪くも，対流圏の気象——もっと端的に言えば天気予報・数値予報——が中心的課題であった．そのような時代にあって，堀内氏はいち早く1966年の気象研究ノートに「地球大気とその組成」，同年の天気解説に「超高層大気の諸問題」を執筆され，更に1969年には「超高層物理」(共立出版) を上梓されるなど，気象学会における新分野開拓の旗手をつとめられた．この分野の日本人によるテキストは，従前，地球電磁気学関係者によるものが僅かに散見されるのみであり，その後の永田・等松「超高層大気の物理学」(裳華房，1973) の出版に数年先立っていたことを考え合せると，今更にして堀内氏の先見の明に敬服させられる．

現在，成層圏・中間圏・下部熱圏はひろく中層大気と呼ばれ，そこにおける力学・放射・化学過程の議論は日本の気象学会でもすでに常識として定着したと言って良い．堀内氏は，四半世紀も前に今日の隆盛を予見しておられたのであろうか．

しかしながら，先覚者の常として，気象庁の業務あるいは気象学会の主流的雰囲気と超高層研究とのギャップを堀内氏自身強く感じておられたように思われる．たとえば天気1968年12月号の COSPAR 東京総会の印象記では，氏一流の古風な筆致の中に，Hines や Kellogg 等この分野の著名な外国人学者の講演に感激した心境を語りつつも，理解者の少ない日本の学会に対する揶揄とも取れる心情がのぞいている．その意味で堀内氏は必ずしも日本気象学会における中心的指導者ではなかったかも知れない．しかしその態度は単なる遠吠えとは違って，学問に対するあくなき情熱に支えられた「孤高の人」と呼ぶのにふさわしいものであった．

研究に対する堀内氏の熱意は，気象庁退官後東海大学教授として後進の育成に当たられたことからも伺える．二年前，学会の発展のためにと浄財を気象学会に委託された．その際の手紙の中に，アメリカ気象学会誌の表題が J. of Meteorology から J. of the Atmospheric Sciences へと変ったことを引き合いにして「若い人々の御健闘を期待する」と記してあった．気象学会では氏の御意向を尊重すべく検討を重ねた結果，気象学の境界・周辺および未開拓分野に挑戦している研究者を対象に「堀内基金奨励賞」が設けられることとなった．昨秋の仙台の総会での第一回授賞式には病気療養中のため御列席いただけなかったのが本当に残念であったが，この奨励賞の主旨に沿った新しい発展が次々と生まれてくることが，堀内氏の御遺志に対する最良の御恩返しとなるであろう．謹んで御冥福を祈りたい．

(堀内基金奨励賞担当理事　京都大学・廣田　勇)